



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人質を介した間接的接触による合意保証のメカニズム : 実験による探索的検討
Author(s)	小濱, 祥子; 三船, 恒裕
Citation	北大法学論集, 75(3-4), 425-446
Issue Date	2024-11-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93694
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_Kohama_Mifune_lawreview_75_3-4.pdf



人質を介した間接的接触による 合意保証のメカニズム

—— 実験による探索的検討 ——

小濱 祥子・三船 恒裕

目 次

- はじめに
- 人質による合意保証
- 集団間接触と人質
- 研究デザイン
 - (1) ステージ 1
 - (2) ステージ 2
- 実験結果
 - (1) ステージ 1：人質と停戦の約束
 - (2) ステージ 2：停戦が破棄された場合と遵守された場合
 - (3) 検討
- おわりに

1. はじめに

かつて「人質」は政治共同体間の停戦を保証するための一般的な方法であった (e.g., Phillipson, 1916, p.208; Kershaw, 2011)。例えば、12世紀から13世紀のイングランドで活躍した騎士ウィリアム・マーシャル(初代ペンブルック伯)は幼年期、小領主であった父ジョン・マーシャルの居城ニューベリー城がステューベン王に包囲された際、一時停戦のための人質として差し出された(1152年)。ジョンが停戦を破ったためウィリアムは危うく処刑されかけるが一命を

取り留め、内戦が終わると家へ帰された。

なぜ「人を質に入れる」ことによって、停戦合意の実行を促すことができる
と期待されたのだろうか。本研究はインターネット上で実施されるサーベイ実
験の手法を用いて、この問いへの答えを探索的に検討する。合意保証の手段と
しての人質の慣行はすでに廃れて久しく、国家間における最後の使用例は、い
わゆるオーストリア継承戦争の講和条約であるアーヘンの和約（1748年）にお
いてイギリス国王からフランス国王へと送られたものとされている。しかし現
代国際政治においてもウクライナ戦争が示すように国家間の戦争において、停
戦や和平を実現することが依然として困難であることには変わらない。実際、
戦争の多くは一時的な停戦を経て、再び大規模戦争へと後戻りしている
（Kohama, 2019; Werner & Yuen, 2005）。

既存の研究は、この問題について停戦が失敗する要因を探索し（e.g.,
Blainey, 1988; Grieco, 2001; Hensel, 1994; Kohama, 2019; Senese &
Quackenbush, 2003; Werner, 1999; Quackenbush & Venteicher, 2008）、第三国
による介入や仲介、停戦協定の強化、平和維持活動、体制転換といった停戦合
意の実行を促す方策の効果を検証してきた（Beardsley, 2008; Fortna, 2003;
2004a; 2004b; 2004c; Lo, Hashimoto & Reiter, 2008）。しかしそもそも停戦合意
を維持するための方策には、上記のもの以外、それほど多くの選択肢がないよ
うに思われる。

人質による合意保証を研究することは、既存研究によって取り上げられてい
ない停戦維持メカニズムの発見につながる可能性がある。そこで本稿では、人
質を「主体Aが主体Bに対し一定の果たすべき義務を負っている時、その義務
の履行を担保するため、AがBに差し出し（あるいはBにより略取され）、Bに
より身体的自由を制限される第三者Xのこと」と定義し、人質が停戦維持にお
いて果たす役割を探索的に検討する。

一般的に、人質による保証メカニズムは、Aが義務を果たさなかった場合
に、Aの身代わりとしてXがBから罰を受けることを前提とし、それを回避し
たいAに義務の履行を促す仕組みと理解されてきた¹。こうした人質の理解は、

¹ 理論的には人質は紛争後の利用に限定されるものではないが、紛争以外の場
面では他に利用できる合意保証の手段があるためか、現実には紛争後の利用が
多いようである。

社会科学の諸分野においても一般的に受け入れられている。例えば、ゲーム理論の泰斗であるトマス・シェリングは、世界各地の駐留米軍や随行家族は同盟国にアメリカのコミットメントを示す人質であると論じている。ミサイル技術の発達により、現代では物理的な移動なしに人質をとることが可能になったという彼の指摘も、義務不履行の場合に犠牲になる価値としての人質理解を前提としている（Shelling, 1960, pp.135-136, p.239）。

しかし、人を質にとるという行いが盛んであった中世ヨーロッパの人質に関する近年の研究は、義務不履行の際に人質が殺されるといったイメージは古代の逸話に基づくものであり、中世においては義務が履行されなかった場合でも人質が処罰を受けることは稀であったと指摘している。その上で、人質はむしろコミュニケーション上の役割を担っていたのであり、人質を殺してしまうことはそうしたコミュニケーションの経路を失うことになることと唆されている（Kosto, 2012）。

こうした知見に基づき、本稿では紛争状態にある集団間において人質が停戦合意を保証するメカニズムの再検討を行う。より具体的には人質が集団間の間接的接触を促すことにより、敵対的關係にある集団に対する印象を変化させ、停戦合意が守られるという期待を生み出す可能性を検証する。実証は日本人を対象としたサーベイ実験により行う。その検証結果に基づき「義務不履行の場合に犠牲になる価値」の提供とは異なる保証の仕組みがあり得るのか否かを考察する。

2. 人質による合意保証

本節では、人質が広く用いられた中世ヨーロッパの事例を手がかりに人質の役割について再検討する。中世ヨーロッパにおける人質の実践について残された史料は限られているものの、人質の慣行を網羅的に研究したKosto（2012）によれば、500年から1000年までの間に325件の人質の事例が確認できるといふ。そのうち最も一般的な形態は、服従（submission）の証として人質を差し出すものであった（Benham, 2010, pp.158-161も参照）。とりわけ初期中世のヨーロッパにおいて、人質の供出・交換は和平プロセスにおいて中心的な位置を占めていた（Kershaw, 2011, p.17）。人質として差し出される人物としては為政者の血縁関係にあることが重視され、とくに息子であることが多かった（Kosto,

2012)。

こうした和平合意の保証として人質を用いる例は、12世紀には見られなくなったという (Benham, 2010, p.162)。12世紀以降、最も一般的になるのは交戦国間における捕虜の解放のための身代金支払いの保証として人質を差し出す事例であり (Benham, 2010, p.156)、西ヨーロッパの国家・政治共同体の為政者の間ではそれ以外の目的での人質は13世紀までに用いられなくなっていく。そして人質の実践は主に異民族との関係の中に継承される (Benham, 2010, p.162)。これに対し、国家間・政治共同体間以外の人質の実践も含めて検討したKosto (2012) は、1000年以降15世紀までの間に、人質利用は増加し、かつその実践も多様化したと論じている (p.78)。彼によれば服従の証としての人質の供出は一般的な形態であり続ける一方、敵対関係にある政治共同体だけでなく友好関係にある共同体間や主従関係の文脈などさまざまな場面で人質の実践が見られるようになった。また12世紀には王位継承者の男子だけではなく女性の人質や都市の代表らが人質となる例も増える。

しかし16世紀以降になると人質の実践は国家間の外交以外の分野ではほぼ消滅し、18世紀以降、国家間での使用例も見られなくなる。その後、人質の慣行は、植民地統治や占領地統治におけるパルチザン対策やテロリストによる強制的略取といった形に変質していく (Kosto, 2012)。

こうした実践において、人質はさまざまな命運を辿った。人質の中には丁重にもてなされるものもいたが、半ば幽閉状態におかれるものもいた (Kosto, 2012, pp.34-38)。また重要な指摘は、合意が破られたからといって、人質がその責めを受けて処刑されたとは限らないというものである。人質の運命についての記録は限られているものの (Benham, 2010, pp.163-164)、Kosto (2012) の収集したデータに基づく、500年から1500年の間の1500件の人質に関する事例において、人質が処刑されたという記録が残っているのは30件に満たなかった (p.39)。これについて彼は、人質はコミュニケーション上の役割を果たしており、人質を生かしておくことによりコミュニケーションの経路を維持しようとしたと示唆している。

3. 集団間接触と人質

こうした人質の果たしていた役割について、社会心理学の知見に基づき再検

討する。社会心理学では自己が所属する集団を内集団、所属しない集団を外集団と呼び、人々が内集団成員や外集団成員を区別し、時には差別的に扱う時の心理メカニズムを明らかにする研究を行ってきた (Hewstone, Rubin & Willis, 2002)。外集団に対するネガティブな態度である偏見や、ネガティブな行動である差別を減少させる要因についても検討されてきたが、古くから集団間の接触が偏見や差別を低減させると主張されている (Allport, 1954)。これは集団間接触仮説と呼ばれ、多くの実証研究を生み出してきた (Pettigrew, 1998)。例えば横断的研究として、北アイルランドにおけるカソリックとプロテスタントとの対立を対象とした調査研究では、信仰する宗教が異なる友人がいるほど、あるいは他のコミュニティに友人がいるほど、信仰しない他宗教の人々への態度が緩和されることが示されている (Hewstone, Cairns, Voci, Hamberger & Niens, 2006)。Brown, Eller, Leeds & Stance (2007) では、イギリスの11歳から16歳までの生徒を対象にし、他の学校の生徒の知り合いと会う回数が多いほどその学校の生徒に対する親近感が高まることを縦断データによって示している。Wilder & Thompson (1980) では大学生に対して、自分とは異なる大学生と協力的な課題を行うほどその大学の学生への評価が高まり、その効果は直接接触していない学生に対しても働くことが示された。515の研究で報告された713の独立したサンプルをメタ分析した結果、集団間接触が偏見を低減するのはほぼ間違いないとされている (Pettigrew & Tropp, 2006)。

集団間接触による偏見低減効果は、人々が直接外集団の人と接触する場合だけでなく、間接的な接触をする場合でも認められる (Dovidio, Eller & Hewstone, 2011; Vezzali, Hewstone, Copozza, Giovannini & Wölfer, 2014)。例えば、自分自身ではない内集団の他者が外集団の友人を多く持っているほど、外集団に対する偏見が低減する (Wright et al., 1997)。また、内集団の他者が外集団成員と良好な人間関係を築いている場面を目撃するだけでも、外集団成員の印象がポジティブになる (Wright, Aron, McLaughlin-Volpe & Ropp, 1997)。近年では、自分自身が外集団成員と良い形で交流している場面を想像するだけでも、外集団の印象がポジティブになるとも主張されている (Crisp & Turner, 2009)。

これを人質の文脈に適用すると以下の予測が導かれるだろう。すなわち、人質を供出され、受け入れた側の人々はその人質を通して敵対する外集団成員と接触する。人々は、自分自身は直接接触していなくても、人質が集団内で生活

をしていることから、内集団の他者が外集団の人質と接触し、協力的な関係を築いていると考えるだろう。つまり、間接的な接触を経験する。そうすると人々は敵対関係にある外集団に対して良い印象を持つことができ、結果として良好なコミュニケーションをとることが可能になるだろう。それにより敵対集団が義務を履行するであろうという期待も高まると予想される。

【仮説1】紛争関係にある集団AとBの停戦合意において、集団Aが集団Bに人質を供出することにより、集団Bにおいて集団Aに対する印象が改善し、集団Aが停戦を遵守することへの期待が高まる。

この議論は人質を単に「義務不履行の場合に犠牲になる価値」と捉える通念的理解とは異なる仮説を導く。「犠牲になる価値」を重視する立場から見れば、合意の保証として差し出されるものは物的な財であっても人質であってもその効果に違いはないはずである。それに対し、集団間の間接的接触を重視するのであれば財と人を質に取ることには異なる効果があると予想される。具体的には、財を供出することによって集団に対する印象を好転することはできないが、人質の供出には印象を変える効果があるかもしれない。

【仮説2】仮説1でいう人質の効果は、集団Aが集団Bに約束の証として財を提供する場合よりも大きい。

また人質を差し出す集団に対する印象を考えるのであれば、人質が自発的に差し出されるか否かによって差異が生まれる可能性もある。自発的に人質を差し出した場合、人質を受け取る側はそれを「良い意図」の表れと受け止めるかもしれない。それに対し、強制的に人質を取った場合にはそうした効果は見られないであろう。

【仮説3】仮説1でいう人質の効果は、強制的に取られる人質よりも自発的に人質を差し出す場合の方が大きい。

4. 研究デザイン

前節で提示した仮説について、本研究ではインターネット上で実施されるサーベイ実験を用いて検証する。サーベイ実験とは、主にインターネット上の調査用ウェブサイトの実験参加者を誘導し、実験刺激を無作為に割り当てた上で意識調査を行う仮説検証手法で、近年、これを用いる研究が政治学や国際政治学において急速に増加している（秦 & Song, 2020; Song & 秦, 2020）。

本研究では実験参加者に集団間の紛争と停戦を描いたシナリオを提示した上で、人質の供出に関する実験刺激を無作為に各参加者に割り当てる。それを読んでもらった後、すべての参加者にシナリオ上で敵対関係にあるとされた集団の停戦に対するコミットメントの度合いや、その集団の構成員に対する印象についての共通質問に回答してもらう。これらの共通質問に対する参加者の回答を比較することにより、参加者が直前に読んだ実験刺激の効果を測定する。

具体的な手順としては、調査会社PureSpectrum社の保有するオンライン・パネルに自発的に登録している人の中から本研究調査への参加を自発的に決めた人々を調査用に設計したウェブサイトへ誘導する。これらの人々のうち本調査への参加に明示的に同意した人についてのみ調査を実施する。

（1）ステージ1

調査では、参加者全員にある架空の村と近隣集落の紛争を描いた以下のシナリオを提示する。現代社会においては人質を出す・受け取るということは不自然に感じられることから、シナリオでは近代以前の社会を想起させた。

スマホどころか電気やガスもなく、警察や裁判所といった組織もない時代、ある村に住んでいるあなたは村の人たちと協力して畑を耕したり、山で動物を狩ったりしながら生活しています。幸いなことにあなたの村がある土地は豊かで、秋には多くの実りに恵まれています。

そんななか、あなたの村は毎年のように少し離れた所にある集落から攻め入られます。その集落ではあまり作物が育たず、秋の収穫の時期になると、あなたの村の作物を狙って攻め込めます。よそ者から村を守るため、あなた方が武器をとって戦うこともあります。

昔をよく知っている人によると、相手集落との争いは何度も起こってい

るものの、時には話し合いによって争いが起こらない年もあったと言います。とはいえ、相手集落が攻めないと言ったにもかかわらず、次の年に攻めて来たことも何度もありました。

ある年、村を守るための戦いが上手くいき、あなた方は相手の集落に大きな痛手を与えました。そして相手集落に対して優位な状況で、相手側の長老と話す機会ができました。

このシナリオにおいて参加者らは村を防衛する立場で戦うこととした。これは平和主義的な傾向を持つとされる日本人の回答者らにおける武力行使への抵抗感を低減するためである (Izumikawa, 2010)。また参加者らの村は攻撃を仕掛けてきた集落に対して優位な立場にあり、人質を受け取る側にある。人質は出す側と受け入れる側の双方の外集団評価に影響をもたらし可能性があるものの、本研究ではまず受け入れる側に着目することとした。

続いて以下の四つの実験刺激のうちから一つを無作為に選び各参加者に提示する。実験刺激は参加者らの村と敵対集落の停戦に対する人質供出の有無およびその性質である。まず統制群では二年間の停戦のみが宣言され、人質の供与はない。実験群1では二年間の停戦の保証として相手集落が彼らにとって価値のある（しかし参加者の村にとっての価値は自明でない）財を質に出す。実験群2では自発的に人質が差し出される。実験群3では参加者の村によって強制的に人質が取られる。具体的な文言は以下の通りである（強調も原文の通り）。参加者はこれらのうち、いずれか一つだけを読むこととなる。

【統制群】 そこで、相手集落の長老は「向こう二年はこの村を攻めない」と言い残し、逃げ帰って行きました。

【実験群1】 そこで、相手集落の長老が「向こう二年はこの村を攻めない」と言って、集落到に代々伝わる財宝を、その証（あかし）としてあなたの村に預けました。その財宝は世の中にひとつしかないもので、その集落にとっては他の物に代えられない大切な物だそうです。あなた方は、その財宝を二年間、預かることにしました。

【実験群2】 そこで、相手集落の長老が「向こう二年はこの村を攻めない」

と言って、長老の息子を、その証（あかし）としてあなたの村に自発的に預けてきました。相手集落では長老の家系が代々集落をおさめてきており、次の代を継ぐのはその長男しかいないそうです。あなた方は、その息子を二年間、迎え入れることにしました。

【実験群 3】そこで、相手集落の長老が「向こう二年はこの村を攻めない」と言ったので、その証（あかし）として、あなた方は長老の息子を村に預けるよう要求し、長老はしぶしぶ息子を二年間、預けることにしました。相手集落では長老の家系が代々集落をおさめてきており、次の代を継ぐのはその長男しかいないそうです。

これらの文章を読んだ後、すべての参加者に①敵対集落がどのくらい二年間の停戦を守るとするか、②敵対集団の人々に対しどのような印象を持つかを尋ねる。①については敵対集落が向こう二年の間に攻め込んでくる可能性を 0 パーセントから 100 パーセントの間の数値を回答してもらう。

②については集団に対するステレオタイプに関する研究の知見を応用し、集団への印象を「能力 (competence)」と「意図 (warmth)」の二次元に分けて尋ねることとした (e.g., Fiske, Cuddy, Glick & Xu, 2002; Cuddy et al., 2009)。具体的には、「能力」が高いか低いかという次元について、敵対集落の人々が「有能である (capable)」「自信がある (confident)」「優れている (skillful)」「優位である (superior)」「競争力がある (competitive)」の五項目を、また良い「意図」を持っているか否かという次元について「信頼できる (trustworthy)」「誠実である (honest)」「善良である (nice)」「利他的である (altruistic)」「友好的である (friendly)」の五項目を用意した。そして各項目にどのくらい当てはまるかを、1（当てはまらない）から 7（当てはまる）までの数値で回答してもらう。これらが分析における従属変数となる。

以上の項目に加え、実験群 2 と 3 に振り分けられた参加者には、人質と「話してみたい」「一緒に働きたい」等と考えるかも尋ねる。

以上の従属変数について、統制群と実験群 1 を比較することにより合意の保証として財を提供することの効果を実測できる。また統制群と実験群 2 を比較することにより、合意の保証として自発的に人質を差し出すことの効果、統制群と実験群 3 を比較することにより、強制的に人質を取られることの効果を実

測する。さらに実験群 1 と 2 を比較すれば、財を質に取る場合と人を質に取る場合の違い、実験群 2 と 3 を比較することにより人質が自発的に供出される場合と強制的に取られる場合の違いを観察することができる。

(2) ステージ 2

本研究では、合意が守られた場合と破られた場合で人々の敵対集団の構成員への印象がどう異なるかも検討する。そこで上記のステージ 1 に続き、以下の二つのシナリオを順番に提示する（強調は原文通り）。どちらを先に提示するかは無作為に割り当てた。

【実験群 A】相手の集落の長老が、「向こう二年はこの村を攻めない」と言ったにもかかわらず、二年を待たずに再びあなたの村は集落から攻撃を受けました。

【実験群 B】相手の集落の長老が、「向こう二年はこの村を攻めない」と言った言葉通り、あなたの村は、集落から二年間、攻撃を受けることはありませんでした。

参加者は上記のいずれかを読んだ後、ステージ 1 で回答した敵対集落の人々に対する印象についてもう一度回答する。なお回答を変更することへの参加者の抵抗感を減らすため、質問への答えはステージ 1 と同じでもよいし、違ってよいという指示を明示的に与える。また合意の破棄を受けて人質に罰を与えるか、合意の遵守を受けて人質を解放するか否かも尋ねる。その後、最初に表示されたのではない方の実験刺激を読み、同じ質問に回答してもらう。

最後に、人質に関する考え方に加え、性別や年齢、学歴、社会的支配志向性（Pratto, Sidani, Stallworth & Malle, 1994；三船 & 横田, 2018）などの共通質問を行う。

5. 実験結果

2023年 4 月にインターネット上で日本の居住者を対象に実験を実施し、401 件の有効回答を得た。実験参加者の基本属性は表 1 の通りである。回答者の年齢はおおむね日本の人口構成に沿って分布しているが、性別については実験群

1において女性の割合が少なく、実験群3では多くなっている。学歴についても、大卒者の多い統制群と少ない実験群では17パーセントほどの差がある。この偏りについては後に若干の検討を加える。

表 1. 実験参加者の基本属性

属性		統制群 (N=104)	実験群 1 (N=96)	実験群 2 (N=100)	実験群 3 (N=101)
年齢	20代	14 (13.5)	16 (16.8)	15 (15.0)	16 (15.8)
	30代	14 (13.5)	13 (13.7)	15 (15.0)	12 (11.9)
	40代	19 (18.3)	10 (10.5)	11 (11.0)	15 (14.9)
	50代	13 (12.5)	15 (15.8)	16 (16.0)	21 (20.8)
	60代	27 (26.0)	21 (22.1)	23 (23.0)	17 (16.8)
	70歳以上	17 (16.3)	20 (21.1)	20 (20.0)	20 (19.8)
性別	女性	47 (45.2)	39 (40.6)	49 (49.5)	57 (56.4)
学歴	大卒	60 (58.3)	55 (57.9)	40 (41.2)	47 (46.5)

注) 数値は各項目に当てはまる参加者の人数を表す。括弧内数値は各群における割合(%)を示す。

具体的な分析に入る前に、操作チェックをしておく。実験群2と3において、敵対集落の長老の息子を預かったことについて、いわゆる「人質」を預かったと考えるかを尋ねたところ、自発的な人質供出のあった実験群2では78パーセントの回答者が「そう思う」または「ある程度そう思う」と答えており、強制的に人質をとった実験群3でも72パーセントが人質を預かったと認識していた。停戦の約束の証として提供される人質の有無を実験刺激として用いる本研究の意図の通りに受け止められていたようだ。

(1) ステージ1：人質と停戦の約束

ステージ1ではまず参加者に、敵対集落が二年間のうちに合意を反故にして参加者の村に攻め入る確率を予想してもらった。回答は0から100パーセントまでで得た。これに対する実験刺激の効果を示したのが図1である。停戦の保証として敵対集落が財宝を預けた場合（実験群1, difference [diff.] in means: -11.2, $p = .003$, $n = 200$ ）、自発的に人質を預けた場合（実験群2, diff. in means: -11.9, $p = .002$, $n = 204$ ）、強制的に人質を取られた場合（実験群3, diff. in means: -14.2, $p < .001$, $n = 205$ ）のいずれの場合にも、統制群と比較して、敵

対集落による攻撃の予測確率は有意に低下した²。すなわち仮説1の予想通り、人質の存在は、停戦合意が守られるという期待を上昇させる。

他方、仮説2および3について、合意保証が物ではなく人によってなされること（実験群1と2, diff. in means: -0.67 , $p = .874$, $n = 196$ ）、強制的な人質ではなく自発的な人質によってなされること（実験群2と3, diff. in means: -2.29 , $p = .567$, $n = 201$ ）に有意な差は見られなかった。以上のことから、コストをかけた約束は信頼されやすいが、その合意保証メカニズムが人質であるか、人質供出が自発的か強制的かによる差は見られないことが分かった。なお敵対集落が50パーセントよりも有意に高い確率で約束を破り攻めてくると予想されたのは統制群のみで、いずれの実験群においても約束が破られる確率は50パーセントと有意な差はなかった。

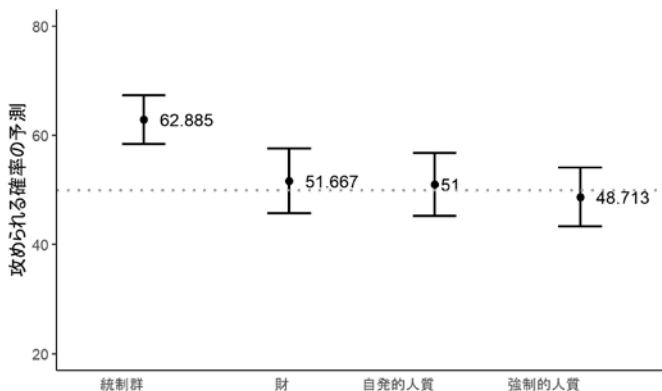


図1. 敵対集団が攻めてくだろう確率予測に対する実験刺激の効果

注) 図中の黒点は各群の平均値、点の上下の線は95%信頼区間を示す。横点線は50%を示している。

次に、人質の供出が敵対集団の構成員についての印象を変える可能性について検討する。前述のように、調査では敵対集団の構成員について、「有能である」

² 以上の結果はボンフェローニ法を用いて有意水準を調整しても変わらなかった。

あるいは「利他的である」といった十項目の要素について、それぞれどの程度当てはまると感じるか、1から7の間の数値で回答してもらった。十項目に対する回答に対して因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行なったところ、意図次元に分類されるべき「利他的である」の項目が能力次元に対して因子負荷量が高いというパターンが見られた。しかし、他の項目は先行研究と同様のパターンを示したため、先行研究通りの因子構造を仮定して分析することとした。クロンバックの α 係数は能力において0.84、意図において0.87と、いずれも高い内の一貫性を示した。そこで、以下の分析では能力と意図、それぞれ五項目の平均値を合成し、従属変数として用いる。この尺度は1から7までの値をとり、値が高いほど敵対集団の構成員に対し好印象を抱いていることを示す。

図2は敵対集団の構成員に対する印象が、実験群ごとにどのように異なるかを示したものである。左のパネルは能力について、右のパネルは意図についての結果を示している。能力について、統制群と実験群1（diff. in means: 0.309, $p.adj.$ = .152, n = 200）、実験群2（diff. in means: 0.319, $p.adj.$ = .104, n = 204）、実験群3（diff. in means: 0.221, $p.adj.$ = .474, n = 205）を比較したところ³、それぞれの間に有意な差は見られなかった。また意図について、統制群と実験群1（diff. in means: 0.182, $p.adj.$ = 1, n = 200）、実験群2（diff. in means: 0.141, $p.adj.$ = 1, n = 204）、実験群3（diff. in means: 0.299, $p.adj.$ = .315, n = 205）を比較したところ、それぞれの間に有意な差は見られなかった。すなわち敵対集落に対する印象は、彼らがコストをかけた約束をするかどうかでは変わらない。

また人質が自発的に出された場合と強制的に取られた場合で、人質の取り扱いについても有意な差は見られなかった（紙幅の都合から分析結果の詳細は割愛する）。

³ ボンフェローニ法を用いて有意水準を調整した場合の結果を報告する。

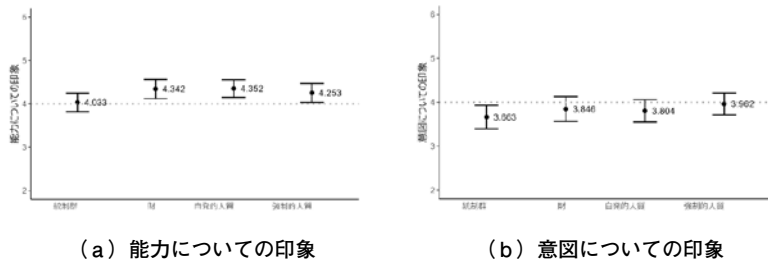


図2. 敵対集団の構成員についての印象に対する実験刺激の効果

注) 図中の黒点は各群の平均値、点の上下の線は95%信頼区間を示す。横点線は中間点である4を示している。

(2) ステージ2：停戦が破棄された場合と遵守された場合

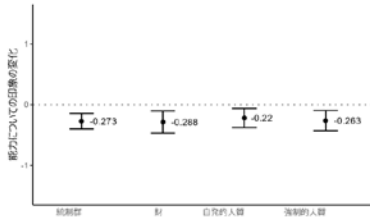
ステージ2では合意が破られた場合と守られた場合で、敵対集団への印象が変化するかについて検証する。そこでステージ1と同様の合成尺度を作成し、ステージ1と2の差分を従属変数とした。この変数において正の値はステージ2においてステージ1よりも印象が好転したことを、負の値は印象が悪化したことを意味する。分析結果を図3に示した。

敵対集団が約束を破棄して回答者の村に攻め入った場合の結果を示した図3 (a) および (b) によれば、すべての群において約束の破棄は敵対集団の構成員への印象を有意に低下させた (能力: $F(1, 397) = 42.41, p < .001$ 、意図: $F(1, 397) = 121.89, p < .001$)。またすべての群において能力に関しても (統制群: $-0.273, ci = [-0.403, -0.143]$ 、実験群1: $-0.288, ci = [-0.471, -0.104]$ 、実験群2: $-0.220, ci = [-0.377, -0.063]$ 、実験群3: $-0.263, ci = [-0.429, -0.098]$) 意図に関しても (統制群: $-0.363, ci = [-0.504, -0.223]$ 、実験群1: $-0.669, ci = [-0.899, -0.439]$ 、実験群2: $-0.530, ci = [-0.740, -0.320]$ 、実験群3: $-0.580, ci = [-0.765, -0.396]$)、印象は中間点の0を下回った。すなわち約束を破ることがネガティブな印象をもたらすということが示された。他方、条件間での差は見られなかった (能力: $F(3, 397) = 1.95, p = .122$ 、意図: $F(3, 397) = 0.37, p = .772$)。

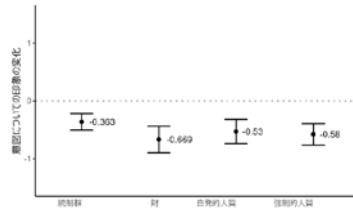
なお敵対集団が約束を破った場合に、財や人質を「罰として傷つけなければならない」という意見に対し、「やや賛成」「かなり賛成」「強く賛成」と答え

た人は、財について52パーセント、自発的人質について48パーセント、強制的人質について63パーセントであった。

約束が破られた場合

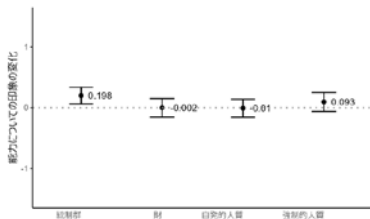


(a) 能力についての印象

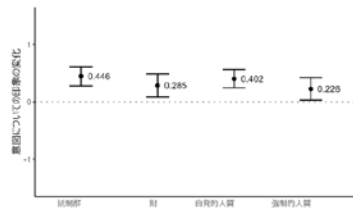


(b) 意図についての印象

約束が守られた場合



(c) 能力についての印象



(d) 意図についての印象

図3. 敵対集団の構成員についての印象の変化

注) 図中の黒点は、敵対集団の構成員への印象についてステージ2の回答からステージ1の回答を引き、その平均値を各群について求めたもの。点の上下の線は95%信頼区間を示す。横点線は変化なし(ゼロ)を意味する。

次に敵対集団が二年間の停戦を守った場合について図3(c)および(d)を見ると、すべての群において合意の遵守は、意図に関しては敵対集団の構成員への印象を有意に向上させたが ($F(1, 397) = 118.56, p < .001$)、能力に関しては有意な変化は見られなかった ($F(1, 397) = 3.52, p = .061$)。意図に関してはすべての群において、印象は中間点の0を上回った(統制群: 0.681, $ci = [0.471, 0.891]$ 、実験群1: 0.606, $ci = [0.358, 0.855]$ 、実験群2: 0.672, $ci = [0.470, 0.874]$ 、実験群3: 0.469, $ci = [0.246, 0.693]$)。能力に関しては、統制群に

においてやや印象の向上が見られたが ($0.198, ci = [0.061, 0.335]$)、その他の条件では中間点の0と変わらない値が示された (実験群1: $-0.002, ci = [-0.153, 0.149]$ 、実験群2: $-0.010, ci = [-0.156, 0.136]$ 、実験群3: $0.469, ci = [-0.063, 0.249]$)。すなわち合意の遵守は特に意図次元においてポジティブな印象をもたらすことが明らかになった。とりわけ統制群においても印象が実験群1に比べて好転したことは、担保のない中でも約束が守られたことが好意的に評価されたものと推測できる。ただし、意図に関しても ($F(3, 397) = 0.78, p = .507$) 能力に関しても ($F(3, 397) = 1.75, p = .157$)、条件間の差は見られなかった。

合意が遵守された後、財や人質を「相手に返さなければならない」という意見に対し、「やや賛成」「かなり賛成」「強く賛成」と回答した人は、財について80パーセント、自発的人質について87パーセント、強制的人質について89パーセントであり条件間に有意な差はなかった。

(3) 検討

以上の分析では、財や人質の供出には停戦の約束の信びよう性を高める効果がある一方で、敵対集団の構成員への印象を変化させる効果は見出せなかった。また財を質に入れることと人を質に入れることの違いは観察されなかった。このことに関連して、いくつかの可能性を検討しておく必要がある。第一に、実験刺激の割り当てに偏りがあった可能性である。先に述べたように性別や学歴について分布に偏りが見られることから、この可能性は排除できない。そこで以上の分析で用いた従属変数に対する実験刺激の効果について、性別および学歴(大卒か否か)を統制変数として用いつつ、最小二乗法を用いて推定した。分析結果は前項の分析結果とおおむね一貫しており、統制変数の有無によって結果が大きく異なるものはなかった。ただし、最小二乗法による分析は、観察できない交絡因子の影響を制御できないことには注意したい。

第二に、実験参加者が実験刺激に十分な注意を払わなかった可能性がある。実験参加者は、できるだけコストをかけずに回答を完了し報酬を獲得しようとする傾向がある。そのため調査に対して十分な注意を払わずに実験シナリオを読み飛ばしたり、最初に表示された選択肢をとりあえず選んだりするといったサティスファイス (Satisfice) がしばしば起こる (Krosnick, 1991)。この問題は調査実施者による監視の行き届かないオンライン調査においてより深刻となりうる (三浦 & 小林, 2015)。今回の実験では、そうした行為を抑止し調査に

充分な注意を払うように促すため、調査前半にIMC (Instrumental Manipulation Check, Oppenheimer, Meyvis & Davidenko, 2009) 設問を挿入した。こうした注意喚起を行ったとしてもサティスファイスを完全に排除することはできないものの、実験結果の解釈に影響を与えない程度に軽減させることができたと考ええる。例えばステージ2では、約束の破棄が敵対集団の構成員の能力や意図についての印象を悪化させ、約束の遵守が意図についての印象を好転させるという直観的な結果が観察された。これは参加者が実験シナリオおよび実験刺激を読んだ上で回答を注意深く選んでいるということを示唆している。

第三に今回の実験で用いたシナリオや実験刺激で想定される状況が現代日本社会とは大きく異なるものだったために、回答者が実験刺激を十分に理解したりうまく想像できなかったりした可能性がある。これについて参加者にシナリオの描写する状況を想像するのがどのくらい難しかったかを尋ねたところ、85パーセントの回答者が「はっきりと想像できた」、「かなり想像できた」あるいは「そこそこ想像できた」と答えており、想像するのが難しいと感じた参加者はそれほど多くなかった。実験群ごとの差異はそれほどなかったが、自発的人質の方が想像しやすく (89%)、強制的人質が最も想像しづらかったようだった (79%)。

また人質に関する倫理的な抵抗感が回答に影響を与えた可能性も否定できない。調査において人質について尋ねたところ、たしかに大多数の参加者が人質を用いることは許されないと回答した。他方、近代以前については参加者の多くが当時としては人質を用いることは許されたし、仕方のないことだったと答えていた。実験シナリオでは近代以前の状況であることを明記したため、多くの参加者はシナリオの状況を自然なものとして受け止めたのではないかと予想される。

6. おわりに

本稿は、かつて広くみられた人質による停戦の保証について、そのメカニズムをサーベイ実験により検証した。これまでの通念的理解では、義務不履行の際に人質が身代わりとして罰を受けるという期待が、義務の履行を促すと考えられてきた。これに対し本稿では、中世ヨーロッパにおいては義務不履行の際にも人質が処刑されることは少なかったという指摘を手がかりに、人質が果た

し得る役割について再検討を行った。具体的には、人質が紛争状態にある集団間の間接的接触を促すことにより、敵対集団に対する印象を改善し、停戦が守られる期待を高めるのではないかと考えた。

この仮説について日本人を対象とするサーベイ実験の方法を用いて検証した。その結果、人質の提供は敵対集団が停戦の約束を守るという期待を上げることが分かった。他方、約束の証として自発的に人質を差し出す場合と、財を差し出す場合あるいは強制的に人質が取られる場合で違いはなかった。また敵対集団の能力や意図をめぐる印象に対しては、人質を差し出すことに予想されたような効果は見られなかった。ただし敵対集団が約束を破った時にはネガティブな印象が形成され、約束を破った時にはポジティブな印象が形成されることは確認できた。

今回の実験結果から人質の提供は、停戦が守られる期待を上げることにより停戦の維持に貢献しうることが示された。ただし上記の実験結果のみから、そのメカニズムについてなんらかの結論を導き出すことは難しい。人質を通じた間接的接触の効果を確認することはできなかったが、これはシナリオ上で人質を預かるという文章を読んだだけでは十分な間接的接触が生じなかったことが原因かもしれない。実際に人質を見たり会話したりするといった過程を実験に取り入れることができれば違った結果が得られる可能性はある。また短いシナリオ文のみを読んで敵対集団に対する印象を答えるのが多くの回答者にとり難しい作業であったことは否定できない。今後の研究ではこうした点をふまえた実験設計を検討したい。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、西平等先生および前田亮介先生より有益なご助言をいただいた。また、池寄航一さんには研究のご支援をいただいた。心より感謝申し上げる。なお本研究はJSPS科研費20K20747の助成を受けたものである。

参考文献

- 秦正樹 & Song Jaehyun. (2020). オンライン・サーベイ実験の方法：実践編. *理論と方法*, 35(1), 109-127.
- 三船恒裕 & 横田晋大. (2018). 社会的支配志向性と外国人に対する政治的・差別的態度：日本人サンプルを用いた関連研究. *社会心理学研究*, 34(2), 北法75(34・442)748

94-101.

- 三浦麻子 & 小林哲郎. (2015). オンライン調査モニタのSatisficeに関する実験的研究. *社会心理学研究*, 31(1), 1-12.
- Song Jaehyun & 秦正樹. (2020). オンライン・サーベイ実験の方法：理論編. *理論と方法*, 35(1), 92-108.
- Allport, G. W. (1954). *The Nature of Prejudice*. Addison-Wesley.
- Beardsley, K. (2008). Agreement without peace? International mediation and time inconsistency problems. *American Journal of Political Science*, 52(4), 723-740.
- Benham, J. E. (2010). *Peacemaking in the Middle Ages: Principles and practice*. Manchester University Press.
- Blainey, G. (1988). *Causes of War* (3rd ed). Free Press.
- Brown, R., Eller, A., Leeds, S., & Stace, K. (2007). Intergroup contact and intergroup attitudes: A longitudinal study. *European Journal of Social Psychology*, 37(4), 692-703.
- Crisp, R. J., & Turner, R. N. (2009). Can imagined interactions produce positive perceptions? Reducing prejudice through simulated social contact. *American Psychologist*, 64(4), 231-240.
- Cuddy, A. J., Fiske, S. T., Kwan, V. S., Glick, P., Demoulin, S., Leyens, J. P., ... & Ziegler, R. (2009). Stereotype content model across cultures: Towards universal similarities and some differences. *British Journal of Social Psychology*, 48(1), 1-33.
- Dovidio, J. F., Eller, A., & Hewstone, M. (2011). Improving intergroup relations through direct, extended and other forms of indirect contact. *Group Processes & Intergroup Relations*, 14(2), 147-160.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology* 82(6), 878-902.
- Fortna, V. P. (2003). Inside and out: Peacekeeping and the duration of peace after civil and interstate wars. *International Studies Review*, 5(4), 97-114.

- Fortna, V. P. (2004a). Does peacekeeping keep peace? International intervention and the duration of peace after civil war. *International Studies Quarterly*, 48(2), 269-292.
- Fortna, V. P. (2004b). Interstate peacekeeping: Causal mechanisms and empirical effects. *World Politics*, 56(4), 481-519.
- Fortna, V. P. (2004c). *Peace Time: Cease-fire Agreements and the Durability of Peace*. Princeton University Press.
- Grieco, J. M. (2001). Repetitive military challenges and recurrent international conflicts, 1918-1994. *International Studies Quarterly*, 45(2), 295-316.
- Hensel, P. R. (1994). One thing leads to another: Recurrent militarized disputes in Latin America, 1816-1986. *Journal of Peace Research*, 31(3), 281-297.
- Hewstone, M., Cairns, E., Voci, A., Hamberger, J., & Niens, U. (2006). Intergroup contact, forgiveness, and experience of "The Troubles" in Northern Ireland. *Journal of Social Issues*, 62(1), 99-120.
- Hewstone, M., Rubin, M., & Willis, H. (2002) Intergroup bias. *Annual Review of Psychology*, 53, 575-604.
- Izumikawa, Y. (2010). Explaining Japanese antimilitarism: Normative and realist constraints on Japan's security policy. *International Security*, 35(2), 123-160.
- Kershaw, P. (2011). *Peaceful kings: Peace, power and the early Medieval political imagination*. Oxford University Press.
- Kohama, S. (2019). Territorial acquisition, commitment, and recurrent war. *International Relations of the Asia-Pacific*, 19(2), 269-295.
- Kosto, A. J. (2012). *Hostages in the Middle Ages*. Oxford University Press.
- Krosnick, J. A. (1991). Response strategies for coping with the cognitive demands of attitude measures in surveys. *Applied Cognitive Psychology*, 5(3), 213-236.
- Lo, N., Hashimoto, B., & Reiter, D. (2008). Ensuring peace: Foreign-imposed regime change and postwar peace duration, 1914-2001. *International Organization*, 62, 717-736.
- Oppenheimer, D. M., Meyvis, T., & Davidenko, N. (2009). Instructional

- manipulation checks: Detecting satisficing to increase statistical power. *Journal of Experimental Social Psychology*, 45(4), 867-872.
- Pettigrew, T. F. (1998). Intergroup contact theory. *Annual Review of Psychology*, 49, 65-85.
- Pettigrew, T. F., & Tropp, L. R. (2006). A meta-analytic test of intergroup contact theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90(5), 751-783.
- Phillipson, C. (1916). *Termination of war and treaties of peace*. The Lawbook Exchange. Princeton University Press.
- Pratto, F., Sidanius, J., Stallworth, L. M., & Malle, B. F. (1994). Social dominance orientation: A personality variable predicting social and political attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67(4), 741-763.
- Quackenbush, S. L., & Venteicher, J. F. (2008). Settlements, outcomes, and the recurrence of conflict. *Journal of Peace Research*, 45(6), 723-742.
- Senese, P. D., & Quackenbush, S. L. (2003). Sowing the seeds of conflict: The effect of dispute settlements on durations of peace. *Journal of Politics*, 65(3), 696-717.
- Schelling, T. C., (1962). *The Strategy of conflict*. Harvard University Press.
- Vezzali, L., Hewstone, M., Capozza, D., Giovannini, D., & Wölfer, R. (2017). Improving intergroup relations with extended and vicarious forms of indirect contact. In *European Review of Social Psychology: Volume 25* (pp. 314-389). Routledge.
- Werner, S. (1999). The precarious nature of peace: Resolving the issues, enforcing the settlement, and renegotiating the terms. *American Journal of Political Science*, 43(3), 912-934.
- Werner, S., & Yuen, A. (2005). Making and keeping peace. *International Organization*, 59(2), 261-292.
- Wilder, D. A., & Thompson, J. E. (1980). Intergroup contact with independent manipulations on in-group and out-group interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38(4), 589-603.
- Wright, S. C., Aron, A., McLaughlin-Volpe, T., & Ropp, S. A. (1997). The

extended contact effect: Knowledge of cross-group friendships and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73(1), 73-90.